

(3) 重度視覚障害における健康関連 QOL への影響

川崎医療福祉大学大学院 感覚矯正学専攻 博士課程 藤原 篤之
川崎医療福祉大学 感覚矯正学科 田淵 昭雄

【要 旨】

目的：患者の全人医療を行う目的において，健康関連 QOL (以下 HRQOL) 評価が重要視され，近年 HRQOL の評価法が報告されるようになった．今回，重度視覚障害者 (身障手帳 1，2 級を所持する者) を対象に，HRQOL の評価尺度である VFQ-25 (疾患特異的尺度) と SF-36 (包括的尺度) を用いて HRQOL 評価を行った．

対象及び方法：対象は 71 名 (女 32 名，男 39 名) で平均年齢 58 歳である．そのうち身障手帳 1 級所持者は 40 名，2 級は 31 名であった．全対象者に，VFQ-25 と SF-36 による HRQOL 評価を行った．VFQ-25 は 19，SF-36 は 35 の項目から構成される．

結果：VFQ-25 では全項目スコアで身障手帳 1 級所持者のほうが 2 級よりも低い値を示した．特に，一般的見え方と近見視力による行動の項目が低下する傾向にあり，両眼でのものの見え方の低下のうち，

特に近見視を必要とする場面での行動制限を自覚している傾向にあった．また SF-36 では身障手帳 1，2 級所持者ともに全項目スコアが国民標準値より低値を示し，その傾向は 1 級所持者に顕著であった．そして，日常生活上の行動を身体的な障害の理由により自力で行うことができないと強く感じるとともに，特に仕事や普段の活動時において身体的，精神的な理由による制限を自覚しているという傾向にあった．両尺度から総合的に解釈すると，重度視覚障害による影響は仕事などの活動時に現れ，その要因として近見視を必要とする場面での行動制限によると考えられた．

考按及び結論：患者の HRQOL を評価するために，疾患特異的・包括的尺度を組み合わせる事で，重度視覚障害者の総合的な HRQOL を評価することができた．今後，両尺度の特徴を兼ね備えた独自の評価法を検討していく予定である．